

尼崎の「冬の風物詩」大覚寺節分会

大覚寺身振り狂言

大覚寺で毎年、2月3日の節分会に、本堂前の舞台上演される狂言。鯛口の鉦と締め太鼓の音を伴奏に、せりふなしで、身振りだけで演じられる。

平成19年度、地域社会で長年にわたり努力し、伝統文化を守り育ててきた事が認められ、兵庫県「ふるさと文化賞」を受賞。

はじまり

大覚寺文書（古文書の内、中世文書56点は県指定文化財）の中に、天保11年（1840）に狂言が奉納されていた記録があることが契機となり、幕末から明治にかけて途絶えていた身振り狂言の復活を望む有志が、無言狂言「壬生大念仏狂言」で有名な京都壬生寺の協力を得て、昭和28年の節分から復活。

大覚寺身振り狂言師

平成18年生（2006）から昭和19年生（1944）までの有志22名（平成22年節分現在）で構成。現在3代目、4代目の者も演じているが、檀家以外も歓迎している。

演目

壬生狂言師、中村迅太郎氏から指導を受けた「節分厄払」「橋弁慶」「閻魔庁」のほかに、大覚寺に伝わる、琵琶法師にまつわる伝説を基にした「十王堂」や、かつて大覚寺があった大物を舞台に、源義経と静御前の別れを描いた能楽「船弁慶」を題材にした「大物之浦」など、尼崎の歴史や大覚寺の古文書に基づく作品にも取り組んでいる。

身振り狂言奉納舞台

平成17年（2005）身振り狂言復活50年を記念して常設舞台完成。舞台鏡板には、大覚寺草創を物語る室町時代の絵巻物（土佐光信作・米国フリーア美術館所蔵）から、往古の尼崎の海辺の松風と潮騒を、日本画家の五世長谷川貞信氏によって描かれた。